

地域の芸術文化の活性化プロジェクト

「因州和紙の可能性Ⅱ」

附属芸術文化センター 石谷 孝二 平井 覚 筒井 宏樹
新倉 健 佐分利育代 西岡 千秋

I. はじめに

学生及び大学院生が、授業を通じて地域の芸術活動の企画・運営に関わり、自治体や地域の芸術団体と協働して事業を展開するプロジェクトである。

学生は大学教員の指導の元に、文化政策・アートマネジメントの見地から事業企画の問題点の検討を行うと共に、具体的な運営の方法、また自治体や芸術家との良好なコミュニケーションの重要性を実践的に学ぶことが可能となる。一方、自治体や地域の芸術団体は、企画内容や芸術活動の質や内容について、専門家としての大学教員の知見を得られることに加え、大学生の行動力や新鮮な発想を事業に活かすことが可能となり、そのことにより、地域の芸術文化の質の向上や活性化をはかることができると考え計画した。

H26年度は和紙の可能性に特化して事業を計画した。

II. 事業内容

前回のワークショップと同様の横浜在住の写真家水本俊也氏の指導のもと、因州和紙の可能性について講演会及びワークショップを実施した。各自撮影したデータをパソコン上で調整・加工し、ラミネート和紙にカラープリント及びモノクロプリントをした。カラープリントはハネパネに張り手作りの印を押し作品に仕上げた。

当日のスケジュールは以下の通りである。

10:00-12:00 講演、レクチャー①、紙漉き、個人&共同撮影

12:00 - 13:00 昼食

13:00 - 16:00 レクチャー②、和紙へのプリント、作品制作：ハレパネにプリントを貼る。印を押しして完成。講評

レクチャー①：撮影について（光、テーマ(見せたいもの、表現したいもの)）

レクチャー②：モノクロプリント及びカラープリントについて

III. 成果

光を通した写真の味わいは和紙独自の効果があり、和紙の可能性を感じることができた。あおや和紙工場の遠藤浩明氏に技術面からの応援を頂き、和紙漉きの体験の他、印作りも取り入れたので盛りだくさんの内容であったが和紙の魅力や可能性を考える機会になった。参加者からは様々な和紙の可能性についての提案がなされた。



写真①講義の様子



写真②和紙漉体験



写真③写真データの取込み



写真③講評の様子

Ⅲ. 考察

地域に根ざした文化的価値を再確認することを目指した事業の2回目であったが、学生及び一般の芸術愛好家の積極的な参加で一定の成果が得られたものになった。今回は前回の経験をふまえ、さらに工夫をして事業の展開をはかり、新たな可能性を引き出すようなワークショップを計画した。特にハネパネに作品を貼付し、完成作品を作成したり、印を作って作品に押す事によって和紙の魅力を引き出すものになった。前回同様、地域の団体の協力のもと積極的な提案もありお互いの連携がよく出来たと思われる。